

週刊ダイヤモンド 今週の一冊

北村行伸

平成 18 年 11 月 27 日号

「わたしを離さないで」

カズオ・イシグロ(著)、土屋政雄(訳)

早川書房 2006年4月30日刊

臓器売買による腎臓移植が発覚したかと思えば、さらに病気で摘出された腎臓までもが移植に用いられていたことが明らかになり波紋を呼んでいる。確かに、日本移植学会の倫理指針では生体臓器移植は親族間に限られており、第三者からの提供は原則として認められていない。当然ながら、供給される臓器は限られている。一方、腎臓病患者が血液を濾過するために人工透析を定期的に行うことの負担は非常に高く、腎臓移植を望む患者は多い。この根強い生体臓器移植の要求にだれがどのように答えればいいのか。

今回紹介するのは現代最も高い評価を得ている作家の一人であるカズオ・イシグロの最新作である。テーマは臓器提供を前提としたクローン人間である。凡庸な作家であれば、臓器移植を巡る医師と患者のやりとりや国家の倫理と人間の尊厳などについて書くのであろうが、イシグロはクローン人間の学園生活に焦点を当て、しかもクローン人間の話であることがほとんどわからないような筆致で淡々と物語を進行させていく。クローン羊であれば数年もすれば成長するだろうが、クローン人間は成人に達するまでに20年を超える年月が必要になる。また、感情もあれば知性もあるので、いずれ臓器提供者になることが運命づけられていたとしても、ある程度の情操教育を行ったり、健康維持を図ることが必要になる。もし我々が、クローン人間であれば、何を望んで生きていくだろうか。もし、クローン人間が極めて優れた資質を持っていれば、臓器提供以外に、その資質を伸ばして人類のために貢献することは認められないのだろうか。そして何より、クローン人間は愛する人と新しい生活を始めることは許されないのだろうか。イシグロの想像力の世界の中で、我々はクローン人間をどう受け入れればよいかという切実な問題に迫られる。

我々の目の前にある臓器移植の問題に底の浅い倫理観を振り回す前に、稀代の作家の手になるクローン人間の物語を静かに読んで、人間の業の深さや生きることの悲しみを受け止めてほしい。